

西豪州日本人会・日本クラブとの共催による砕氷艦しらせ歓迎会での挨拶
(2月25日)

砕氷艦しらせ 齋藤一城 艦長 及び海上自衛隊の皆様
第66次南極観測地域観測隊 原田尚美 隊長、及び南極観測隊の皆様
西豪州日本人会、西豪州日本クラブの皆様

本日、砕氷艦しらせの皆様を公邸にお迎えし、西豪州の日本人コミュニティの皆様と一緒に歓迎できることを嬉しく思います。私にとり在パース日本国総領事として最後のお客様がしらせの皆様であることを大変光栄に思います。私は2年5ヶ月の任期を終え、明後日に次の任地である南アに向け出発致します。

しらせの皆様には昨年末に南極への往路にも、フリーマントルに立ち寄って頂き、日本人会主催忘年会に多数ご出席頂き、すばらしい特技の数々をご披露して頂きました。コロナ渦を乗り越えて、当地での交流活動を実に6年ぶりにフルに再開頂けることとなり、心より感謝申し上げます。

今季はしらせが3回フリーマントルに寄港して頂けると承知しており、今回がその2回目の寄港になります。調査任務、誠にお疲れ様でございます。

私の当地2年5ヶ月間の任期も、コロナ後に人的交流が飛躍的に拡大する時期と重なったこともあり、幸いなことに日本と西豪州の人々の距離は着実に近づきました。ANAパース・成田直行便が再開し、通年運航となり、昨年は92万人の豪州人が訪日するなど、目覚ましい進展となりました。今年も、10月に日豪経済会議が予定され、豪海軍フリゲート艦プロジェクトにおいても進展が期待される大切な年を迎えております。

砕氷艦しらせの交流活動の再開は、まさに象徴的な進展であり、苦しい時期の努力を決して忘れてはならないと、ありがたさをかみしめております。しらせは、海を越えた友情、粘り強い努力と強靭さの象徴であると思います。

本日もフリーマントル・カレッジとパース日本人学校の子供たちに艦内見学の機会を頂きご丁寧なご説明を頂きました。フリーマントル・カレッジの中学二年生達からは、エンジンの動かし方、氷海における針路のとり方などの専門的な質問があり、日本人学校生徒からは、どうやったら将来しらせに乗船できるのかというような質問もありました。きっと本日の経験を忘れることなく、科学への関心と将来への夢を育んで行ってくれるものと確信しております。

2016年にしらせが、座礁して氷に閉じ込められた豪州の砕氷艦の乗員66名を救助したエピソードは、日豪協力の一例として、豪州政府関係者に繰り返し言及されています。国境のない大陸「南極」ならではの助け合い精神の発現であり、困難に陥った外国観測隊の支援を率先して行うことで日本への尊敬につな

がっています。限られた燃料と食糧をやりくりし、艦内では一緒に和太鼓も叩いて励ましたこと、皆様の努力を知り、深い敬意と御礼を申し上げます。

世界を一変させた100年に1度の感染症の蔓延により、南極大陸にコロナを持ち込まないという責任を果たすため、大変なご苦労があったとうかがっています。私は、ケープタウン在勤時代、第61次越冬隊の1名が、体調を崩され、緊急帰国されるというオペレーションに関わりしました。2020年5月の厳しいロックダウンの中、特別許可を得て上陸し、日本人医師と2名、針の孔を通すような綱渡りで帰国する緊急オペレーションでした。

原田観測隊長の前任にあたる橋田観測隊長は、緊急オペレーションの際に極地研におられ緊密に連絡をとらせて頂きました。先例やマニュアルもなく、成功する保証がないチャレンジであっても、冷静な判断と、粘り強い努力で、乗り越えられてこられた皆様のご尽力にあらためて敬意を表します。

1965年の砕氷艦ふじの時代から当地日本社会の方々はフリーマントルの岸壁に出迎えと見送りに出かけておられます。本日、ふじを迎える1968年当時の子供達の写真を展示していますので、ご覧になって下さい。雨の日も風の日も欠かさず日豪両国の国旗をふりに行った空手の父、賀陽敬真先生の心意気は、小松崎日本クラブ会長に受け継がれ、しらせの入港・出港時には必ずサポーターの方々を誘って旗振りにでかけられています。

昨年末のしらせ見送りには自分も参加させて頂きました。日本定住者の皆さんより和太鼓を叩き、「イッテラッシャーイ」の掛け声に、しらせの甲板に勢揃いした乗組員の方々が帽子を回して応じ、汽笛が鳴りました。フリーマントルから乗船した南極観測隊のご家族の方々も見送りに参加し、オレンジ色の船体が見えなくなるまで一緒に手をふりました。水先案内船が港に戻って来るさらにその先をイルカが嬉しそうに飛び跳ね、感動で涙を流す方もいました。そしてその感動が広く伝わり、一昨日の出迎えには30数名が参集し、「オカエリー」の掛け声に「タダイマー」と返ってきた皆様の声は感動的でした。

極限の状態だからこそ展開されるドラマ、人間のすばらしさ、日本人の輝きを知ることが出来る、しらせのフリーマントル来港は、西豪州の日本人コミュニティにとり、かけがえのない機会であると心より感謝しております。

砕氷艦しらせと南極観測活動の今後の益々のご発展を祈念しております。これまで過去60年間の当地関係者とのご協力、西豪州との友好関係への大きな貢献に、心より感謝申し上げますとともに、しらせプロジェクトの更なるご発展を願っております。なお、仮に喜望峰ルートを使用される場合、再び緊急支援が必要な場合は、南アに内藤がいることをお忘れなく、ケープタウンの岸壁において日本人コミュニティとともに出迎えに参ります。

(了)